

Title	ワークショップへの感想文⑤ 緊縛シンポジウムの学 術批判への対応について
Author(s)	
Citation	臨床哲学ニューズレター. 2022, 4, p. 122-122
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86371
rights	
Note	

## Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

特集3 「〈応用〉することの倫理――緊縛シンポ、ブルーフィルム、ジェンダー」

## ワークショップへの感想文⑤ 緊縛シンポジウムの学術批判への対応について

## 匿名希望

私は当日発表者全員の報告を聞くことはできなかったのですが、河原様、小西様の報告と、 その後の質疑応答をオーディエンスの 1 人として聞かせていただきました。河原様が報告 された京都大学の緊縛シンポジウムについては、以前からシンポジウムに対して学術批判 がなされていたこと、それへの対応が取られていなかったことを知っていたので、どのよう に回答がなされるのか気になっていました。半分は興味本位のようなところがあったので すが、実際に質疑応答の中でシンポジウム発表者側の意見を聞いていると、何ともいたたま れないような気持ちになりました。というのも、学術批判と問題点に対して、真っ先に謝罪 という形で対応したのが若手の女性 2 人だけだったからです。そのような状況になったの は、もちろんそのお2人のシンポジウムでの報告にも問題があったからだとは思いますが、 全体的な対応の不誠実さや遅れの責任を負うべきは責任者にあるはずなのに、なぜその2人 ばかりが真摯に謝らなければならないのか。その言葉を聞いていると心苦しくなってしま いました。司会の方が言われていたように立場が弱い人にばかり皺寄せがきていることに 対し、同じ世代の女性として強い違和感を覚えました。女性差別や女性軽視ということは、 当事者がどう感じるかということが重要であり、第三者である一傍聴者がとやかくいうこ とではないと思っています。しかし、当日のその光景はもはや若手、女性が弱い立場になら ざるを得ない構造が研究室や学会のなかで出来上がってしまっているのではないかと感じ てしまいました。現在私は大学の講義で女性史を教えていますが、今の学生たちの意見を聞 いていると、「ひどい女性差別というのはもはや過去のもの」と考えている学生が多いよう に思います。時代の先端をいくべき京都大学で女性、若手差別のような研究環境があるのだ とすれば、学生にも示しがつかないうえ、女性研究者の一人としても大変残念だと感じます。 (とくめいきぼう)